



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ダビデ」はダンで発見されたか? : テル・ダン碑文をめぐる最近の聖書考古学上の論争について
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教学, 31, 47-51
Issue Date	1996-07-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46573
Type	journal article
File Information	31_47-51.pdf



「ダビデ」はダンで発見されたか？

——テル・ダン碑文をめぐる最近の
聖書考古学上の論争について——

山 我 哲 雄

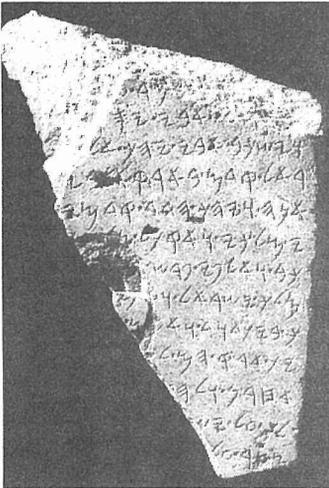
旧約聖書のサムエル記下五章によれば、イスラエル統一王国の確立者ダビデは、先住民であるカナン系エブス人の都市国家エルサレムを征服し、これを彼の王国の首都とした。ユダヤの伝統的な年代計算によれば、これは前一〇〇四年頃のこととされるらしい。このことからイスラエルでは、今年（一九九六年）をエルサレム建都三千年目として、これを記念するさまざまな行事が行われつつある。もちろん、この数字は（イエスの生誕年についての議論の場合と同じく）歴史的に正確であるとか、不動の客観的証拠があるというわけではない。学問的なイスラエル史においても、エルサレムの征服と統一王国

の確立は前一〇〇〇年プラス・マイナス一〇年くらいに位置づけられることが多いが、^①そもそも「ダビデ」という名の王が実在したとか、前一〇〇〇年頃にパレスチナ地方のほぼ全土を支配したイスラエル人の統一国家が存在したということとを直接裏付ける聖書外史料は、これまでまったく発見されていなかったのである。聖書中に登場する王たちの中で、聖書外史料で言及されるのは、前九世紀後半のモアブ王メシャの碑文にイスラエル北王国の王オムリの名が現れるのや、年代的にはわずかにそれに先立ついわゆる「カルカルの戦い」（前八五三年）についてのアッシリア王シャルマネセル三世の碑文に、同じく北王国の王アハブの名が現れるのが最初であり、南王国ユダについては、確実なものとしては、前八世紀後半のアッシリア王ティグラト・ピレセル三世の年代記にユダ王アハズの名が現れるのが最初である。^②したがって、懐疑的な研究者の中には、いわゆるダビデ・ソロモンの黄金時代についての旧約聖書の伝承のほとんどを、遙かに後代になってから創作された民族の栄光の過去についてのフィクションと見なし、その歴史性をまったく認め

ない見方さえ顕著になってきた。⁽³⁾

ところが、パレスチナ北部の遺跡テル・ダン（イスラエル王国の領土の理念的北限に当たる。サムエル記下三・一〇等を参照）で一九九三年七月に発掘された一つの石碑が、この問題についての大論争を引き起こした。

すなわち、同年のうちに早くも『イスラエル・エクスプレーション・ジャーナル』誌に発表された、発掘指揮者のA・ピランと碑文解読に協力した碑文学者J・ナヴェの報告⁽⁴⁾によれば、これは玄武岩のより大きな石碑の断片であり、高さ三十二センチメートル、幅が最大二十二センチメートルの大きさで、テル・ダンの城門付近の壁を



テル・ダンで発見されたアラム語の石碑の断片。碑文の8行目には「イスラエルの王」、9行目にはbytdwd（「ダビデの家」？）の文字が見られる。

作するために再利用されていた。表面にはアラム語で刻まれた碑文が十三行にわたって読み取れ、字体や同じ層から発見された土器の年代から、前九世紀前半のものと思われる。内容は極めて断片的であるが、アラムの王がみずからの戦勝を誇ったものであることは明らかである。特に注目されるのは、その際の戦いの相手として、八行目に「イスラエルの王」(mlk isrl)が挙げられているだけでなく、続く九行目に「ダビデの家」(pdytdwd)の名が挙げられていることである（ヘブライ語の場合同様、アラム語碑文も子音字のみで、母音は記されない）。旧約聖書および古代オリエント文書の慣用表現によれば、王名「ダス」「家」の語は「王朝」を意味する。したがってこのダン碑文は、「イスラエル王」の国である北王国とは区別された存在としての「南王国の「ダビデ王朝」の存在と、その創始者であるダビデという人物の歴史的存在を確認する、最初の聖書外史料と見なされたのである。この「発見」は、ただちにより広い「聖書考古学ファン」の読者層を持つ『バイブリカル・アーケオロジリー・レビュー』誌に大々的に紹介されただけでなく、さらに

『ニューヨーク・タイムズ』のような有力紙や『タイム』のような一般誌にも「聖書の歴史性を裏付ける新発見」として取り上げられ、或る種のセンセーションを巻き起こした。他方でS・アヒトブ、Z・カライ、E・ペウク、池田裕らの考古学や碑文学、歴史学の専門家は、碑文学の判読困難な箇所や失われた部分の再構成を試みつつ、その歴史的背景や、旧約聖書中の歴史的伝承との関連性についてより詳しい研究を発表した。⁽⁷⁾

ダン碑文の発見がこれほど大きな反響を呼んだ背景の一つには、前述した、捕囚以前についての旧約伝承の大部分の信憑性を否定するような懐疑論の横行に對して、この「ダビデの家」への言及が決定的な反証と受け取られたことがあったことは疑いない。これに對して、当然予想されたことであるが、懐疑派の側からは碑文の問題の箇所の読み方について、F・H・クライヤー、P・R・デイビス、T・L・トンプソン、N・P・レムケ、E・ベン・ズビによって直ちにさまざまな疑念や反論が提出された。⁽⁸⁾ 彼らの論点は、以下の四点に整理できよう。(1) 問題の碑文の年代は、書体学的に発表者が言うほど古い

ものではなく、せいぜい前八―七世紀のものである。(2) 碑文には当時の習慣に従い単語と単語と区切る点が付されていいる。「ダビデの家」と読むならば「家(ベート)」と「ダビデ」の間に区切りの点がなければならぬ。しかし、問題の箇所にはこの区切りの点がなく、bytdwdと六つの文字が直接並んでおり、六文字が単一の単語を構成することを示している。(3) bytdwdは、形態的にベツレヘム、ベテル、ベトシエメシユ等と同一の構造を示しており、地名として解釈できる。(4) 前述のように碑文は子音字だけで書かれており、後半の三文字は「ダビデ」ではなく「ドード」と読むこともできる。「ドード」は「愛すべき者」を意味し、ヤハウエの称号であった。したがってベテルが「神の家」を意味するように、問題の bytdwd は「愛すべき者(ヤハウエ)の家」を意味し、ダン付近の地名ないし聖所(列王記上二二・二九―三〇参照)を意味する。したがって、この碑文はダビデ王朝とも南王国とも無関係だ、というのである。最も急進的なトンプソンやレムケは、「ダビデ」という人物像自体、もともとエルサレムないしその神殿を意味した「ドード(ヤハ

ウエ)の家」という呼称から二次的に生み出された架空の人物像だと論じ、ダン碑文は逆にダビデの歴史的事実を否定する証拠だ、とまで主張する。

このような異論に対しては、A・レイニー、D・N・フリードマン、J・ジョヒガン、B・ハルパーン等により、反対派の方法論を批判し、「ダビデの家」という読みを擁護する再反論が寄せられた。その際には、議論白熱のあまり、論調がしばしば冷静で論理的な学問的討論の範囲を越えて感情的にエスカレートする傾向も目立ち始めている。例えば、レイビスがその論文に「砂上の楼閣『ダビデの家』——聖書拡大解釈主義者の罪」という挑戦的な題を付け、「ダビデ王の歴史性はアーサー王のそれと同程度」と断じたの対し、レイニーはそれへの反論に「『ダビデの家』と脱構築主義者の家」という揶揄的な題を付け、「レイビスは(碑文学の)アマチュアであり、その意見は安心して無視してよい」と応じた。クライヤーは石碑そのものが捏造品である可能性をほのめかす。擁護派の立場を「ファンダメンタリズム」、「オールブライト時代の最悪の越権への逆行」とこきおろす、トンプソンと

レムケの連名の論文の題は「ピランはダビデを殺したか？」であり、著者たちはそれを、「然り、われわれはそう考える」と結ぶ。これに対しハルパーンは、「歴史の揉み消し」と題する論文で、「過少評価主義者たち」の主張を「修正主義者」の「ヒステリー」と断ずる、といった具合である。

健全な学問的論争は大いに歓迎すべきであるが、このような中傷合戦さながらの悪意ある非難の応酬には憂慮すべきものがある。いずれにせよ、この石碑の小さな断片の発見をきっかけに、旧約聖書の考古学界は今、大いに「燃えている」。この炎は、碑文の残りの部分が発見されて決定的な証拠が明らかになるまで、当分は鎮火しそうもない。

注

- (1) 山我哲雄／佐藤 研『旧約新約 聖書時代史』(教文館) 五〇―五二ページ、および同書付録の聖書歴史年表一〇―一一ページ等を参照。
- (2) Texte aus Umwelt des Alten Testament (TUAT),

- Band I, pp.360-61, 375, 646-50.を参照。『新教・タムトス聖書歴史地図』（新教出版社）一〇六—一〇七ページを参照。
- (3) G. Garbini, *History & Ideology in Ancient Israel*, 1988; N.P.Lemche, *Ancient Israel: A New History of Israelite Society*, 1988; *idem*, *Is it still Possible to Write a History of Ancient Israel?*, *Scandinavian Journal of the Old Testament (SJOT)* 8, 1994, 165-188; D. W. Jamieson-Drake, *Scribes and Schools in Monarchic Juda*, 1991; T. L. Tompson, *Early History of the Israelite People*, 1992; P. R. Davies, *In Search of "Ancient Israel"*, 1993; H. M. Niemann, *Herrschaft, Königtum und Staat*, 1993 註。
- (4) A. Biran and J. Naveh, *An Aramaic Stele Fragment from Tel Dan*, *Israel Exploration Journal (IEJ)* 43, 1993, pp.81-98.
- (5) *David Found at Dan*, *Biblical Archaeology Review (BAR)* 20.2, 1994, pp.26-39.
- (6) *The New York Times*, November 16, 1993, pp.B1, B9; *Is Bible Fact or Fiction?*, *Time*, 146.25, 1995, pp.46-54.
- (7) S. Ahituv, *Suzerain or Vassal?*, *IEJ* 43, 1993, pp.246-47; Z.Kallai, *The King of Israel and House of David*, *IEJ* 43, 1993, p.248; E. Peuch, *La stèle araméenne de Dan*, *Revue Biblique (RB)* 101, 1994, pp.215-41; 池田 裕「光世社から——テル・タンと新アラム語碑文の発見」筑波大学『地域研究』一九九五年、一一—一七ページ。
- (8) F. R. Cryer, *On the Recently-Discovered "House of David" Inscription*, *SJOT* 8, 1994, pp.3-19; P.R.Davies, *House of David Built on Sand. The Sins of the Biblical Maximizers*, *BAR* 20.4, 1994, pp.54-55; N.P.Lemche and T.L.Tompson, *Did Biran Kill David?*, *Journal for the Study of the Old Testament (JSOT)* 64, 1994, 3-22; E. Ben Zvi, *On the Reading 'bytdwd' in the Aramaic Stele*, *JSOT* 64, 1994, 25-32; T.L.Tompson, "House of David": *An Eponymic Referent to Yahwe as God-father*, *SJOT* 9, 1995, pp.59-74.
- (9) A. Rainey, *The "House of David" and the House of the Deconstructionists*, *BAR* 20.6, 1994, p.47; D. N. Freedman and J.Geoghegan, "House of David" is There!, *BAR* 21.2, 78-79; B. Halpern, *Bible Review (BR)* 11.6, 1995, 26-35, 47.